

拝啓

皆様、そろそろ寒くなってきましたが、いかがお過ごしですか。
ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。
喜んで頂ければ幸いです。知っていて役に立つことなどをまとめてみました。

感動にありがとう

編集者 細川栄一

温かい人の想いに胸打たれて元気になれる

最期まで何も言わずに逝ったお父さん

横浜に、土井松子さんというハツラツおばあさんがいます。今年七六歳。三年前に、ご主人をガンで亡くし、現在は一人暮らし。近所には、息子、娘夫婦も住んでおり、趣味の押し花や、婦人会の旅行へと、毎日楽しく暮らしています。

松子おばあさんの口癖は、「これもお父さんのおかげ。ありがとう。」

元気の秘密を尋ねたら、「それはね」といってニッコリ笑い、「天国にいるお父さんから届いた電報のせいなの。」といいます。「天国から電報が出せるんですか？」と不思議そうな顔をする私に、松子おばあさんは次のような話をしてくれました。

ご主人の土井正彦さんは、生真面目で無口で子煩悩。冗談の一つもいわず、テレビを見てもニュースばかり。「子供達によく文句を言われていました。」と笑います。

健康に人一倍気を使う正彦さんの顔色が、だんだん悪くなり、そのうち食欲が無くなり、これはおかしいと思った松子さんが、検査を受けさせました。

結果は大腸ガン。すぐに手術をしましたが、切除不能で閉じてしまいました。病院でも正彦さんは、優等生患者。先生や看護婦さんのいうことに素直に従います。一時は自宅に帰れるほど回復した正彦さんでしたが、三ヶ月後、ついに帰らぬ人となりました。自分の死期を感じていたのでしょうか。身の廻りのものは、きちんと整理されていました。

「最期の最期まで、お父さんらしい死に方だったよ。私に何もいわず、眠ったまま死んでしまったんだよ。」と松子さんは悲しそうに語ります。

生きる勇気をくれた天国からの「ありがとう」

無口で、存在感のないと思っていた正彦さんの存在の大きさに気づいたのは、初七日を終え、ほっと一息ついたときでした。

「お父さん、お風呂……」そういったとたん、「うん」と受け止めてくれる人がいないという現実がそこにありました。松子さんの元気のよさも、おしゃべりも、無口な正彦さんという懐の深い聞き役が存在してはじめて成り立っていたのです。

「お父さん、私寂しいよ。ウンでもスンでもいいから話しかけてよ」

松子さんは、仏壇に向かって語り掛けます。

「お父さんに何もしてあげられなかった。申し訳ない」と松子さんは繰り返します。

母親のこれほどの落ち込んだ姿をはじめて見る子供達も慌てます。

兄妹でお母さんを引き取る相談をしはじめました。そんな矢先、松子さんから、はずんだ声で、電話が子供達のところにかかってきました。

「お父さんがね。天国から結婚記念日に電報くれたんだよ。
「今度の日曜日に、うちに来てちょうだい。」そうって電話が切れました。

次の日曜日、子供達は、お母さんの打って変わった元気さに、びっくりしてしまいました。すっかり以前にも増して、イキイキしているのです。

不思議がる子供達の前に、松子さんは一通の電報を置きました。
そこには...

「長い間お世話になりました。松子と結婚して、私の人生は何倍にも何十倍にも楽しくなりました。私はあなたと結婚してよかった。金婚式一緒に祝えなくて申し訳ない。私はあなたをしっかりと見守っています。
これからは好きなように楽しく生きてください。長い間ありがとう。」
とありました。

「お父さんが、天国から電報をくれたんだよ。それも金婚式の結婚記念日にね。はじめは誰かのいたずらかと思ったから、電報局に問い合わせたんだよ。そしたら...
一年前から電報の予約ができるんだって教えてくれたの。
前から用意してくれてたんだよ。」

松子さんの目からは、涙がポロポロこぼれます。
「お母さんね、無口な父さんに、少し不満だったのよ。
それが父さんが亡くなって一人になったとたんに、後悔ばかりしてね。もしかして、私と結婚してなかったら、父さん、もっと幸せになれたんじゃないかって思えてね。すっかり気落ちしていたんだよ。

でも、この電報もらって、母さんは明るく元気な松子さんでいるのがいちばんいいんだってわかったんだよ。

私だって、父さんと結婚してよかったって胸張っていえるよ。
よい子供達にも恵まれたしね。これからは、楽しいこといっぱいするんだ。
天国に行ったときに、父さんに楽しい話をたくさんしなくちゃならないからね。
お前達にも心配かけたね。母さんもう大丈夫だから、安心しておくれ。母さんまだまだ元気だよ。」
自分を認め、元気を取り戻した松子さんの姿がそこにありました。

.....
感動は、身近なところにあります。
感動できる感性を持つこと。
そして心に浮かんだ相手のよいことは、**照れずに相手に伝えてください。**
あなたの感動を、感謝を素直に口に出して伝えればいいのではないのでしょうか？
そうすれば、あなたの人生は、ますます感動的なものになっていくでしょう。

この「天国からの電報」は、感動新聞の中でも個人的にとっても好きなものです。
私はこの文章を書いている途中でも、そして何度読んでいても泣けます！
涙がポロポロ出てきて、泣かされます！
自分の親父をガンで亡くしていることも一因です。

自分自身の理想としては...
自分が死んでからも「あいつはいいやつだったな！」と思われる人間になりたいですね。